

英語差別用語の基礎的研究(1)：性差別語

*A Basic Study of Changes in the English Language Made in Order to Avoid Discrimination :
Part One, Sexist Language*

苅部 恒徳*

0. まえがき

1960年代から再び盛んになったfeminism運動の目標は、女性が不当に差別されている社会の改革であり、男女差別撤廃運動であった。その大きな特徴の一つは、言語と社会の関係が強く意識され、言語が社会を規制し、また社会が言語を規制する相互規制の関係にあることに強く注目した点にあった。この相互関係の一つの表れが言語に見られる性差別の状況である。この社会的男女差別は長年のうちに言語に制度化され固定化され、その使用者（個人および集団）の観念を支配するようになる。制度化された言語が今度は社会に因習として差別の固定観念を植え付ける、という訳である。この悪循環の中に女性（ばかりなく男性も）縛り付けられてきたことに注目したのだった。

最近、feminism運動を含む形でアメリカではpolitically correctという公的社會生活における人種、階級、性別、性的志向の差別を正す（‘supporting broad social, political, and educational change, especially to redress historical injustices in matters such as race, class, gender, and sexual orientation’ (AHD, 4th ed., s.v. politically correct)）。運動が官民あげて進められていることに我々はもっと注目すべきである。

本号の(1)では性差別語と批判され廃止・言い換えを指示された英語（特に米語）の語彙・語法の代表例を主に辞書から収集・呈示し、実態の把握に努める。次号では(2)として英語における人種・障害者差別語を考察し、最後に差別用語の監視と言葉狩りの問題を扱う予定である。

先にアメリカにおいては官民あげての差別語撤廃運動が行われていると述べたが、その官庁の方は例えば、従来の男性職業名とみなされるものをすべて中性的なもの（gender-neutral terms）に言い換えた、連邦労働省（U.S. Department of Labor）の出した*Dictionary of Occupational Titles*であり、民間の方は例えば、いち早く辞書の上で差別語に使用者の注意を喚起した*Random*

*KARIBE, Tsunenori [新潟国際情報大学]

House Webster's College Dictionary, 1st ed., 1991 (以下RHWCD1) である。後者は性差別の問題を含む見出し語に(最近の多くの辞書がそうするようになったが) usage notesを付けているほかに、巻末に“*Avoiding Sexist Language*”という解説記事が付されている。この辞書の第2版(1997)(以下RHWCD2)でも巻末記事として性差別語のほかに新たに人種差別語、障害者差別語を含む“*Avoiding Insensitive and Offensive Language*”が付されていて参考になる。

1. 差別語 man

Oxford English Dictionary, 2nd ed. (1993) (以下OED2) はmanがOld English (c750-1100) では、ほぼ男女の別なく‘a human being’を意味し、=L homoであり、男女の別はそれぞれwer (cf. L vir) とwif (> WIFE)、wáþman (WEAPON-MAN) とwífman (WIFE-MAN > WOMAN) のように別語で表現されていたと記述している (man, I. 1. a1d † a.)。現代英語では差別語の代表とも言われるmanが本来は「男」よりも「人間」を意味したことは注目に値する。しかし同じOED2によればmanの「男」の意味もすでに1000年頃に現れているが、その後徐々にmanが「人間」の意味と並んで、「男」の意味を持つようになったのは「女」のwomanと対比されて用いられたからであることはOED2, II. 4. a.に引かれている用例

c1000 ÆLFRIC *Saints' Lives* ii. 78 He..sæde hyre ǣgislice hwæt heo man ne wæs.

(=He told her exactly why she was not a man.)

a1225 *Anchr. R.* 286 Ert tu so wroð wið mon oðer wið wummon þæt [etc.]?

(=Art thou so angry with man or with woman that [etc.]?)

から明らかである。問題はmanが「男」の意味を持つてからも「人間」の意味を持ち続けたことであり、この結果feministによってman ‘male sex’ = ‘human being’であり女性軽視であると攻撃の対象にされたことである。この公式が男性中心社会の原点のように見えたとしても不思議ではない。

先に挙げたアメリカの辞書RHWCD1 (1991) とRHWCD2 (1997) は次のようなmanの言い換えを提案している。

man > human being, human, person, individual (RHWCD1)

mankind, man (collectively) > human beings, humans, humankind, humanity, people, human race,

human species, society, men and women (RHWCD1,2) ; *homo sapiens* (RHWCD2's addition),

man-made > synthetic, artificial (RHWCD1,2)

man in the street > average person, ordinary person (RHWCD1,2)

a man who > someone who, anyone who (RHWCD2)

workingman > worker, wage earner (RHWCD1) (次の-man複合語に入れるべきもの。
(RHWCD2) にはない。)

ハワイ州Honolulu市の委員会Medea Task Forceが出した差別用語の手引書 “Do’s and Don’ts of Inclusive Language” はさらに次のような例を挙げている。

man and his world > world history, history of peoples, humans and their world

man-hours > work hours, staff hours, hours worked, total hours

manhunt > a hunt for ...

manned flight 「有人飛行」 > piloted flight

man power > work force, human resources, labor force, human energy, personnel, workers

man's achievements > human achievements

men of science > scientists

2. -man 複合語

英語には職業 (occupation) や社会的役割 (social role) を担う人を表す-man複合語が多数存在することはよく知られている。国広哲弥・堀内克明 (編) 『プログレッシブ英語逆引き辞典』 (小学館、1999) (以下『逆引き辞典』) の-manの項目には、China-man, Cornish-man, French-manのような民族名なども混在しているので、それら23例を除くと職業や役割名などは全部で504例挙げられている。歴史的に言えば従来職業や役割につくのは「男性」が多く「女性」が少なかったことを反映して-man複合語が次々と作られてきた訳である。-manは従来から場合によっては「女性」も含めて両性的 (dual gender) に用いられることもあったが、圧倒的に「男性」をイメージさせたことは明らかである。このところ女性進出が盛んだから-manの対語として-womanを使用して対等にできるかと言えばそうはならない。ことばの性差別の廃止は-man, -womanのような性を有標化 (marked) した表現をできるだけ無標 (unmarked) の中性的 (neutral) な表現に置き換えることによって達成されるからである。

3. -man 複合語の言い換え語

アメリカでは70年代の初めに連邦労働省は差別的と考えられる、多くの-man複合語を含む3500におよぶ職業名を撤廃するというドラスティックな改革を行い、それらの言い換え語を提案した(れいのるず秋葉「きっと変えられる性差別語」(1996))。筆者は現在この連邦労働省(U.S. Department of Labor)の*Dictionary of Occupational Titles*の撤廃職業名リストを持たないので、代わりに他の辞書や資料からの例をほぼ年代順に挙げてみたい。

Quirk et al., *A Comprehensive Grammar of the English Language* (Longman, 1985) (以下CGEL) は(特に米語)として-manの言い換え語を7例挙げている。

supervisor <i>for</i> foreman	fisher <i>for</i> fisherman
firefighter <i>for</i> fireman	mail carrier <i>for</i> mailman
chair (person) <i>for</i> chairman	spokesperson <i>for</i> spokesman
member of Congress <i>for</i> Congressman	

この文法書はBritish Englishを中心とした非常に網羅的な記述文法書であるが、米語についてもこのように必要な場合には目配りをしているので、この本に記述されている例は出版年の時点ですでに米語で確立していたと見てよいだろう。

1991年の辞書RHWCD1が廃止・言い換えを薦めている-man複合語の例は次の18語である。

anchorman > anchor, **bellman**, **bellboy** > bellhop, **businessman** > businessperson, business executive, manager, business owner, retailer, etc., **cameraman** > camera operator, cinematographer, **chairman** > chair person, chair, **clergyman** > member of the clergy, cleric, minister, rabbi, priest, pastor, etc., **congressman** > representative, member of Congress, legislator, **fireman** > firefighter, **insurance man** > insurance agent, **layman** > layperson, nonspecialist, nonprofessional, **mailman**, **postman** > mail carrier, letter carrier, **policeman** > police officer, law enforcement officer, **salesman** > salesperson, sales representative, **spokesman** > spokesperson, representative, **weatherman** > weather reporter, meteorologist, **workman** > worker.

1997年のRHWCD2は**clergymen** > the clergyを加えたが、**cameraman** > camera operator, cinematographerを除いたので総数は変わりなく、増加していないのが気にかかる。RHWCD1は職業名などで特に性別に言及する必要がないときや総称的に用いるときの言い方として-personを用いたsalesperson, spokespersonは定着したが、councilperson, weatherpersonはまだごちないと

感じる人が多いと述べている。このように言い換えの問題は求人広告などでは男女雇用機会均等法の立場から言い換え語の使用は必須であろうが、一般社会や個人的なレベルではどの言い換え語がどの程度実際に用いられているかは判定が困難な問題である。

“Do’s and Don’ts of Inclusive Language” からこれまで挙げていない例を追加する。

councilman > councilmember, **craftsman** > craftsperson, artisan, crafter, **draftsman** > drafter, drafting technician, **fisherman** > angler, fisher, **middleman** > go-between, liaison, agent, **repairman** > repairer, repair person, **showman** > performer, **statesman** > official, diplomat, **tradesman** > shopkeeper, trader, merchant, entrepreneur, artisan, **tradesmen** > trades people, tradespersons, **workman** > worker, laborer, employee.

1985年のQuirk et al. CGELの後継書ともいうべき同じくらい大部な新文法書、Biber et al., *Longman Grammar of Spoken and Written English* (以下LGSWE) が1999年に出版された。この新しい文法書は4000万語以上からなるLongman Spoken and Written English Corpusを利用して、conversation (AmE & BrE), fiction (AmE & BrE), news (AmE & BrE), academic writing (AmE & BrE), non-conversational speech (BrE), general prose (AmE & BrE) をレジスター (registers) として選び、現在の英語米語の話ことばと書きことばの分析を英文法の見地から行った信頼の置ける画期的な業績である。この文法書の一番目につく特徴は大雑把な頻度数の比較である。量的な数値が個々の文法事例に示されることによって、従来から量的な分布を知りたいと思っていた事例についていくらか知りえることは大きな福音であり、さすがはコンピューターの時代の産物と思わせる。

本書によって (職業名だけではないが) -manと-womanの頻度数を比べてみると、100万語につき-manが約620語、-womanが約40語で、16対1の割合である。-womanの付く上位6語について-manの付く対応語と頻度数を比べてみると、やはり100万語につきspokes-woman / -manは20対115、police-woman / -manは5対35、chair-woman / -manは1対23、business-woman / -manは1対20、congress-woman / -man、horse-woman / -manは共に1対5である。

以上は『逆引き辞典』でハイフンつきの-manを基準に職業語を中心に選んだものであるが、この辞書にはmanを複合語の第二要素とするearly man, little man, sandwich manのような語が全部で218語挙げてある。これらには職業語も含まれているが、全体的には-manと比べると比喩的意味のものが多く、軽蔑語とみなされるものも若干あると思われる。しかしいずれにしても意味的・語形的に女性を排除した表現であることに間違いなく、差別語の対象にはなる。ここで

はこれらを十分に扱うスペースがないので、部分的に扱う。

“Do's and Don'ts of Inclusive Language” から言い換え指示語を拾うと次のものである。

average or common man > average person, ordinary people, typical worker

early man > early humans, early societies

great men in history > great figures in history, people who made history, historical figures

primitive man > primitive people / humans, a primitive

right hand man > assistant, helper, second in command

上記の例は「人間」の意味をmanで代表させたために差別語として扱われたと思われる。従って内容的には上記第1節 (1. man) に入れるべきものである。

4. -woman

『逆引き辞典』には、主に女性の職業・地位を表す-womanの項目にこの複合語が82例見られるが、これからEnglishwoman, Frenchwoman, Scotswoman, Welshwomanなどの民族名4例を除くと78例になる。この中には女性の社会進出に伴い造られたと思われるairwoman「女性飛行士」、anchorwoman「(テレビ・ラジオの) 総合司会者」、businesswoman, camerawoman, clergywoman「女性牧師」、congresswoman「(連邦議会の) 女性議員」、councilwoman「(地方議会の) 女性議員」、craftswoman「女性職人」、forewoman「女性職工長」、nurserywoman「女性種苗園主」、ombudswoman「女性行政監査官」、policewoman, saleswoman, spokeswoman, sportswoman, stateswoman「女性政治家」、superwoman, weatherwoman, workingwomanなど男性形の-manに相当するものがある一方、女性の仕事と決め付けられた「洗濯女」などはlaundrywoman, wash(er) womanと、「家政婦」などはcharwoman, scrubwomanと、日本語の「…女」に相当する用語もある。OED2によれば、wash(er) woman, charwomanはその男性形より初出年代が古く、いわばwash(er) man, charmanを逆成 (backformation) させていると言える。

RHWCD1,2から言い換えるべき (-) woman他の例を挙げると、cleaning woman / lady / girl / maid > housecleaner, office cleaner, housekeeper, cleaning personである。

このように主に職業を表す-manと-womanの分布は社会的・歴史的な理由から前者が圧倒的に多く我々の予想通りであるが、理由は女性進出に伴い-manのすべてに対応する-woman複合語を造る習慣が定着しないうちに、性差を強調しない中間的な表現を求める方向が加速したと思

われる。これは歴史の意肉である。chairwomanの失敗例（OED2のこの語の引用は19世紀までの3例のみ）を見て分かるように、chairmanの女性形を模索する中で古いchairwomanの復活も選択肢の一つであったが、上記の理由から中立形の-personを用いたchair-personが選ばれ、さらに単一語（simplex）のchairに統一されるに至った。

5. woman doctor, etc.

英語では-womanの代わりにwomanを男女のいずれにも用いられる両性（dual gender）の職業名などの前に持ってきて限定的に用いることも考えられ、例えばwoman doctor / driver / journalist / officer / police officer / teacher, etc. (OED2, woman n. II. 6. b. (a)) のような2語複合語が生じた。ここで両性名詞の例をQuirk, et al. CGEL, 1985, p. 315から参考に挙げておく。

artist	cook	doctor	enemy
foreigner	friend	guest	inhabitant
librarian	novelist	parent	person
professor	servant	singer	speaker
student	teacher	typist	writer

このように両性名詞にwomanを冠する造語も-woman同様、女性を有標化（marked）する結果になり、それにより性差別をもたらす可能性が生じる。「女性」とわざわざと断わることによって、かえってある種の文脈では女だてらにと羨望と軽蔑の入り混じった感情が加わる。日本語でもこれらの英語と同じように「女医」「女性ドライバー」「女性記者」「女性職員」「婦人警官」などの用語がかなり最近まで用いられていたが、女性を有標化することも性差別であるとの認識が広まってきて、今ではこれらの用語を用いない傾向にある。先に挙げたdoctor, driver, journalist, officer, police officer, teacher等の両性名詞に性の区別をする必要のある場合には生物学用語的なmale, femaleを冠するのが一般の用法である（Quirk, et al. CGEL, 315）。しかし本来男性の職業と考えられていたものに就いた女性に、或いはこれと逆の場合にそれぞれfemale, maleを冠すると差別語になることにも注意が要る。この場合womanを冠してwoman lawyer (> lawyer) (“Do’s and Don’ts”)としても同様である。

6. 女性接尾辞 -ess

英語における女性接尾辞としてはこの-essが代表的なものであることは言うまでもない。『逆引き辞典』にはこの項目に72例を挙げているが、dragoness, leopardess, lioness, tigressなどふつう動物の雌を意味する語と-stress, -tressという関連女性接尾辞そのものを含んでいるので、これらを除くと65例となる。OED2は-essについて主として歴史的な説明をかなり詳しく行っている。それによれば-essはGk -issa > late L -ssa > *VL -essa > OF -esseの発達・借入経路をたどった。第1段階として中英語期に-essを含む古フランス語のcountess, duchess, hostess, lioness, mistress, princessが借入された。第2段階として14世紀には本来語の名詞や-er形の動作主名詞にも女性接尾辞としてgoddess, dwelleresseのように用いた。16世紀以降-essのついた語が多数造られたが、-erが両性に用いられると、-essのついた多くの語が廃語になった。現在なお用いられている語はauthoress, giantess, Jewess, patroness, poetess, priestess, quakeress, tailoressである。しかしOED2のこの記事はOEDの初版のこの項目を含む第3巻が出版された当時(1897)のままで、今日の状況は述べていないので注意を要する。

-essのつく語のうち中英語期にノルマンの征服貴族の女性称号として借入され今日に至っている baroness, countess, duchess, peeress, princess, viscountessなどやキリスト教会における女性の地位を表すabbess, anchoress, canoness, deaconess, paroness, prelatess, prioress, Quakeressなどの語は過去の歴史や制度の残存としていわば遺物であるのでfeminismの差別用語の対象にはならないのではないか。問題になるのは今でも日常よく用いられるactress, authoress, governess, heiress, hostess, poetess, stewardess, tutoress, wardressなどであろう。authoress, poetessは現在は女性にもactor, author, poetを用いるので特に女性を強調するとき以外は用いない(OED2, authoress n. d.)。governess「女性家庭教師」はこの男性形のgovernorが廃意になっている。heiress, tutoress, wardressはOED2では19世紀までの用例しかなく今日の状況については述べられていない。次に挙げるstewardessの言い換えはあまりに有名である。

1991年の辞書RHWCD1の“*Avoiding Sexist Language*”において言い換え語が挙げられている-ess語の例は、**authoress** > author, **poetess** > poet, **proprietress** > proprietor, **sculptress** > sculptor, **stewardess** (stewardも含め) > flight attendant の5語である。1997年のRWCDC2はこれにactress > actorを付け加えたに過ぎない。1988年の“*Do's and Don'ts*”も既出のものに尽きる。

1996年のAHD3は-essの用法注記でこの女性接尾辞が付いた語が差別語とみなされるようになったのは、同じ職業でも男女で内容に違いがあることをこの女性接尾辞を付けて表そうとし

た点に差別が感じられるからだ」と述べているが、当たっているだろう。この辞書AHDの初版からの特徴的なメリットは、用法注記に学者の意見などを載せるのではなく、当該用法についての周到に準備されたアンケートにpanelistsが回答を寄せ、その意見分布がパーセントで示されていることである。第3版の注記ではGeorgia O’Keeffe is not as well-known as a sculptress as she is as a painter. では65%がsculptressを拒否し、When the ambassadress arrives, please show her directly to my office. では75%がambassadressを拒否したと報告しているが、両例とも女性形を使う必然性がないからであろう。他方There are not very many good parts available for older actresses. では92%がactressesを容認し、Mary Ann is such a charming hostess that her parties always go off smoothly. では87%がhostessを容認していると述べているが、当人の役割がその人の性（女性）によっていて、必然性がある場合には容認度が高いのが分かる。

7. その他の女性接尾辞, -ette, -trix, -enne, -ine

1991年の辞書RHWCD1の“*Avoiding Sexist Language*”は女性接尾辞-ess, -ette, -trix, -enneの付いた語についての項目を設け、避けるべき理由として(1)人の性別についての不必要な言及とみなされる、(2)その語で言及される人が卑小 (triviality) 或いは下位 (inferiority) とみなされることを挙げている。そこで挙げている語はauthoress, poetess, proprietress, sculptressの他はaviatrix「女性飛行士」> aviator, **suffragette**「女性婦人参政権論者」> suffragist, **usherette**「案内嬢」> usherの3例であるが、actress, heiress, hostessは女性の多くはactor, heir, hostの方を好むが、いまだ現役であり、waiter, waitressの言い換え語であるwaitperson, waitron, serverが受け入れられるようになってはきたが、まだ旧来のものにとり替わることには至っていないし、executrix「女性遺言執行人」、testatrix「女性遺言者」のような法律用語は頻度数は減っているがいまだ使用されている、といった有益な情報を提供している。しかし1997年のRHWCD2からはこの項目が消え、-essのみ-man等の項目に入れられていてこの点の記述が一步後退している。

-ineの付いた語はheroineぐらいしかないが、この語の言い換え語heroを挙げているのは1998年の“Do’s and Don’ts”のみで、RHWCD1,2がこれを挙げていないのは不思議である。女性についてheroを使った例を今日では我々が耳聞するところだからである。事実Encartaのheroでは《神話》や文学・映画の主人公の定義の場合を除いては、manを使わず‘remarkably brave person’, ‘somebody admired’ と定義されていて新鮮である。

8. he, she, they

現代英語の3人称単数形は男性のhe, his, himか女性のshe, her, herか中性のit, its, itに区別され、3人称複数形they, their, themには性の区別がないことは周知の事実である。男性女性のどちらも含む両性 (dual gender) の代名詞がないため、従来指示対象の性別が定かでない時には無標 (unmarked) の代名詞として男性形のhe, his, himが総称形 (generic form) として用いられてきたが、この場合も男性形によって女性を含めた人間を代表させる点で性差別撤廃の機運と共に俎上に上ることになった。この総称形が使われてきたのは(1)speaker, listener, writer, teacher, studentなど両性の名詞 (これ自身の性別をするときにはmale / femaleを前につければよい) を指す場合と、(2)everyone, anybody, (no) oneなど不定代名詞を指す場合である。Quirk, et al, CGEL, p. 343は(1)の問題解決法としてTESOL Quarterly Style Sheet, Vol 13 (筆者未見) をそっくり引用している。

- (a) The speaker must constantly monitor *his* listener to check that assumptions *he* is making are shared assumptions.

SUGGESTED REVISION (change to *the* and rephrase) :

The speaker must constantly monitor *the* listener and check that the assumptions *the speaker is making are shared*.

- (b) Very often the writer does not monitor *his* arguments very well or get *his* narrative in the right order.

SUGGESTED REVISION (change to plural) :

Very often writers do not monitor *their* arguments very well or get *their* narratives in the right order.

- (c) The students do almost all the interacting, the teacher taking a back seat. That is to say, *he* is not under the pressure of acting as *chairman or host*.

SUGGESTED REVISION (change to *s/he* and rephrase) :

... That is to say, *s/he* (my italics) is not under the pressure of acting as *classroom director* (my italics).

TESOL Quarterly Style Sheet, Vol 13が提案している解決法は(a)the speakerを指す総称のhis, heを使わずthe listener, the speakerとtheをつけた名詞を用いる。(b)the writer, his, hisの単数形表示を複数形のwriters, their, theirに改める。(c)総称のheを新しいs/he表記に書き換える。Quirk et al.

CGELは最後の実験的なs/he表記の難点として(1)Msと違って対応する音声形がない (s/heはshe or heと読まざるを得ない)、(2)目的格・所有格形がない、の2点を挙げて、s/he表記がどの程度一般に受け入れられるか疑問視しているが、確かに一時的な流行の後、she or he (her or his, her or him) の陰に隠れたようである。Quirkらはいかにも保守的な英国の学者らしく、feminism運動がこれまで何世代にも渡って見逃されてきた言語の性差別の問題を多くの人に気づかせた功績を認めながらも、総称のheを使わせないことにどこまで成功するのか疑問視していた。

先に挙げた両性名詞の単数形や不定名詞anyone, everybodyなどを指す代名詞は指示対象の性別が不明或いは問題にされないときには、従来は男性のhe, his, himを用いた。最近はこれらの男性代名詞の使用を避ける方策が提案され、次第に実行に移されている。方策の一つはhe or she, he/she, his or her, his/her, him or her, him/herを用いるものである。Biber, et al., LSWE, p. 316から例の1部を引用する。

A [Geologist] studying fossiliferous rocks in the field needs only an average knowledge of paleontology in order to make a fairly accurate estimate of the epoch in which the rocks **he or she** is studying belong. (ACAD)

[Anyone] with English as **his or her** native language does not need other languages. (NEWS)

Thus, the [user] acts on **his/her** own responsibility . . . (ACAD)

LSWE, p. 317にはこれら新しい代名詞のうちhe or she, him or her, his or her, he/sheの4形の100万語当たりのレジスター別頻度数を挙げていて興味深い。Conversation, fiction, news, academismの4レジスターのうちacademismの頻度が高く、他のレジスターが5例以下か10例なのに対しhe or sheは30例、his or herは40例、him or herとhe/sheは10例となっている。新しい用法は性差別を避ける必要を特に意識している学者が論文や辞書やマニュアルで奨励し自らが実践する機会が多いことを表しているのであろう。

もう一つの方策は単数の名詞everybody, nobodyなどを指す代名詞にtheyを用いるものである。これはhe or sheなどの場合と違ってconversationやnewsのレジスターでよく用いられる。これについてもLGSWE, pp. 316-7から例文を引用する。

A: Not [everybody] uses **their** indicator.

B: **They** don't use **their** indicator any more.

A: **They** don't. (CONV)

[Everybody] remembers where **they** were when JFK was shot. (NEWS)

[Nobody] likes to admit that **they** entertain very little, or that **they** rarely enjoy it when **they** do.

(NEWS)

OED2, they, pron. 2.によれば、この最後のevery, any, no, etc.や両性の一人を指すthey (= 'he or she')の用法は実は古く、初出例は1526年である。従って現在の用法は一種のrevivalである。

9. その他の差別語 : girl, lady, spinster, old maid

girl

成人女性（18歳以上）の職業や役割についてgirlを冠したり付加したりすることによって軽視の念（disparaging）や庇護の念（patronizing）が生じることは明らかである。こうしたgirl語が差別語とみなされて当然であろう。RHWCD1, “Avoiding Sexist Language” (5. a.) が挙げている例は**bachelor girl** (spinster, old maidと共に) > unmarried woman, **girl athlete**の2例で、RHWCD2, “Avoiding Insensitive and Offensive Language” ではやや増えて、既出のcleaning girl, salesgirlの他、**girl / gal Friday** > assistantの3例が加わったが、bachelor girlが消え、代わりに**bachelorette**を挙げている。“Do’s and Don’ts of Inclusive Language” はRHWCD1,2にはない**career girl** > professional woman, **hula girl** > hula dancerを挙げている。

lady

ladyは本来lord「領主」の対語で「領主夫人」を意味し、次にgentlemanの対語となり「貴婦人、淑女」だが、既出のcleaning lady, sales ladyなどの職業名ではその見かけの尊重とは裏腹に実質的下落振りは著しい。“Avoiding Sexist Language” (2. c.) はladyを冠したlady doctorをfemale lawyer, girl athlete, male secretaryと共に挙げて、本来その職業／役割が女性向きではないと思われていたものに就いた女性にlady, female, girlを、男性向きではないと思われていたものに就いた男性にmaleを冠することによってその人が非凡で（remarkable）あり特異で（peculiar）であることを示して、その人に庇護者ぶる（patronizing）態度の表現になることに注意を促し、例えばdoctorの場合に女性であることを示す必要があるときにはMy grandmother was the first woman doctor to practice in this town. のようにlady（patronizingの意味が強くなるからであろう）よりもwomanを冠する方がよいと、よき指針を与えてくれる。

spinster, old maid

日本語でも「オールドミス」は昔はよく使われたが、今ではあまり聞かれなくなった差別語

ある。spinsterは元来は「紡ぎ女」だが、17世紀までに未婚女性 (old maid) を表す法律用語となり、今では婚期を過ぎた女性を指す代表語になり、“Do’s and Don’ts” ではbacheloretteと共に single (or unmarried) womanへの言い換えが適当と判定されている。

このパンフレットではbachelorも single (or unmarried) manへの言い換えが指示されていてバランスが取れているが、これまで長い間、対語 (pair word) のbachelorとspinsterのうちspinsterの方だけが軽蔑語であった。Robin Lakoff, *Language and Women’s Place* (1973) はsexist Englishを取り上げたパイオニアの著書であるが、そこではwoman vs lady, master vs mistress, He is a professional. vs She is a professional., (John’s) widow vs (*Mary’s) widower, Miss. vs Mr. と共に bachelor vs spinsterも論じられている。これらの対語では必ず一方 (lady, mistress, She is a professional., (*Mary’s) widower, Miss, spinster) が不公平な扱いを受けることに、ことごとその背後の社会通念 (stereotype) の (男女) 差別を明らかにした。

Old maidは*The American Heritage Dictionary of the English Language*, 3rd ed. (Houghton Mifflin, 1996), *Encarta World English Dictionary* (Bloomsbury, 1999), *The New Penguin English Dictionary* (2000) など最近の多くの辞書がspinster (AHD3は指示なし) と共にoffensive (不快語) と用法指示をしている。RHWCD2はこの語にもspinsterにもUsu. Disparaging「ふつう軽蔑的」と指示しているが、offensiveとの違いはdisparagingが使用者の意図的な軽蔑を表し (軽蔑語)、offensiveは使用者の意図に関係なく相手に不快感を与える (不快語) 点にある。

housewife

Housewifeが差別語、不快語であるという感覚は日本人にはいまだ持ちにくいのではないだろうか。“Avoiding Sexist Language”でも“Avoiding Insensitive and Offensive Language”でも“Do’s and Don’ts”でもhousewifeはhomemakerに言い換えるように指示している。RHWCD2では見出し語housewifeのusage noteで不快語とされた理由を「職業として低い地位を暗示するからであり、男性 (夫) との関係で規定される女性 (妻) の職業だからであろう」と述べているのは考えるヒントになる。

coed

この語は男女共学の学校的女子学生を指すcoeducationalの短縮語である。*Merriam-Webster’s Dictionary of English Usage* (1994) は1980年の時点でもはや好まれない語であるという報告と1981年にこの語を過去のものとして述べている引用を挙げている。

10. 男女併記句：man and wife, etc. の言い換え

これまで使われてきた男女併記句も女性差別の観点から言い換えが適当であるとされている。“Avoiding Sexist Language”が挙げているものは、

man and wife > husband and wife

men and girls > men and women, boys and girls

men and ladies > men and women, ladies and gentlemen

President Johnson and Mrs. Meir > President Johnson and Prime Minister Meir, Mr. Johnson and Mrs. Meir

の4例である。次に“Avoiding Insensitive and Offensive Language”から新しい例を挙げる。

Mr. David Kim and Mrs. Betty Harrow > Mr. David Kim and Ms. Betty Harrow

Dear Sir: > Dear Sir/Madam., Dear Madam or Sir., To whom it may concern:

解説の必要もなく、Mrs.のMs.への言い換えと手紙の書き出しにおける女性の敬称の併記或いは男女の敬称を用いない「各位」への表現の切り替えを提案している。Ms.についてOED2(1993)は‘An increasingly common, but not universally accepted, use’と注記して、初出例として1952年の文献を挙げているが、その引用文‘Use of abbreviation Ms. for all women addressees. This modern style solves an age-old problem.’は長年の問題が解決した喜びを示している。

11. おわりに

20世紀後半は、ことばと社会の関係から見るとアメリカのfeminism運動に端を発した男女差別語（人種差別語・障害者差別語も含む）の撤廃の方向に向かってかなりの変化（成果）を見たと言える。本来はAmerican Englishの社会問題であったものがBritish Englishや他の英語へ、さらには日本語のような他の言語とその社会へ広がりを見せたことは、差別語の問題が人間の基本的な人権の問題であることが認識されてきたからであろう。むしろ差別語撤廃運動は国によって（同じ英語圏でも英米では）進展度は異なり、また言語生活には公的私的の両面があり、言語そのものが流動的であるので実情の把握は予想以上に困難である。もう一つの実情把握の困難は、すべての運動がそうであるように、言語差別撤廃運動も提唱者と受け手の認識の違い・落差があるのは当然なので、社会問題を扱う際の注意点ともいえるべきものが社会学では確定しているのかもしれないが、門外漢の筆者は知らない。しかし常識的に言って先に述べた提

唱者と受け手の認識の差に留意することは基本であろう。とはいっても実際には両者の中間が常にあるわけで、そこいらの吟味が大切になる。

文法は規範文法 (prescriptive grammar) と記述文法 (descriptive grammar) に二分されることはよく知られているが、我々が研究資料の大半を頼ってきた辞書はこの中間的なものといえよう。辞書の性格上、使用者に使用上の規範・指針を与えると同時に実態・実状の記述を提供することがその役目だからである。同じ辞書でも連邦労働省の発行した辞書は、男女差別になると思われるすべての職業名の撤廃とその言い換え語の使用を少なくとも官公庁の公文書では指示していると思われるので、もしそうなら正用法を指示するいわば規範辞書に当たる。しかし残念ながら現時点では筆者未見のため、後に訂正が必要となるかもしれないことをお断わりしておく。最近の多くの市販辞書は我々の利用したRHWCD1,2, AHD3, Encarta, New Penguinなどはいずれも各見出し語を含む本文はおおむね記述的であるが、問題語に用法注記 (usage notes) 欄を設けて問題の解説を行っていて便利である。これらの用法注記をすべて網羅したものが、いわゆる用法辞典であり、*Merriam-Webster's Dictionary of English Usage* (Merriam-Webster, 1994) はその一冊である。これらの用法注記は程度の差はあれ、規範的であり記述的である。しかしRHWCD1,2のような差別語に極めて意識的な辞書の、我々が大いに利用した巻末記事は使用上の指針を与える規範的なものであり、それを徹底させたものがホノルル市から出版された文字どおり “Do's and Don'ts of Inclusive Language” と名づけられたパンフレットなのである。

我々が社会言語学の立場から知りたいことは、差別語といってもその意識の有無・程度と使用停止か使用継続かなどの実態である。その語によって、人によって、男女/世代の違い、教育レベルの違い、都市/地方の違いなどの要因によってさまざまであろうと推測されるので、AHDが用法の問題点についてパネリストに行っているアンケート調査のもっと大規模なものと、Longmanの最新の文法書にその成果の一部が見られるcorpusを用いての用例のレジスター別数量的調査をもっと拡大したものが、いわゆる差別語を中心におこなわれることを期待したい。

BIBLIOGRAPHY

References:

“Avoiding Sexist Language” in RHWCD1

“Avoiding Insensitive and Offensive Language” in RHWCD2

Biber, Douglas, et al. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Longman, 1999. (LGSWE)

Lakoff, Robin. *Language and Women's Place*. Cambridge: Cambridge University Press, 1973. かつえ・あきば・れいのるず訳『言語と性—英語における女の地位』有信堂、1985

Media Task Force. “Do's and Don'ts of Inclusive Language.” Honolulu City of County of Honolulu, 1998. (“Do's and Don'ts”) of Inclusive Language”

南出康世『英語の辞書と辞書学』大修館書店、1998、特に第8章「Political Correctness (PC) と英米の辞書」、第9章「セクシズムと英米の辞書」、第14章「英和辞典とセクシズム—『ジーニアス英和辞典』改訂版の場合—

中村桃子『言葉とフェミニズム』勁草書房、1995

Quirk, Randolph, et al. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, 1985. (CGEL)

れいのるず=秋葉かつえ編『女と日本語』有信堂、1993

————— 著「言語変革と社会変革—アメリカの場合」、上野千鶴子+メディアの中の性差別を変える会編『きっと変えられる性差別語』(三省堂、1996年)の第6章161-91頁

————— 著「言語と性差—言語学から記号論へ」、渡辺和子編『アメリカ研究とジェンダー』(世界思想社、1997年)の第13章212-26頁

TESOL Quarterly Style Sheet, Vol 13

Trudgill, Peter. *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. UK: Penguin Books, 1974

Dictionaries:

Allen, Robert, ed. *The New Penguin English Dictionary*. Penguin Books, 2000 (New Penguin)

国広哲弥・堀内克明(編)『プログレッシブ英語逆引き辞典』(小学館、1999) (『逆引き辞典』)

Merriam-Webster's Dictionary of English Usage. Merriam-Webster, 1994

Murray, James, et al. eds. *The Oxford English Dictionary* (Second Edition, 1989) On Compact Disc. Oxford University Press, 1993 (OED2)

Pitts, Mary Dominic, et al. eds. *The American Heritage Dictionary of the English Language*. 3rd ed. Houghton Mifflin Company, 1996 (AHD3)

———. *The American Heritage Dictionary of the English Language*. 4th ed. Houghton Mifflin Company, 2000 (AHD4)

Rooney, Kathy, et al. eds. *Encarta World English Dictionary*. Bloomsbury, 1999 (Encarta)

Steinmetz, Sol, et al. eds. *Random House Webster's College Dictionary*. Random House, 1991 (RHWCD1)

Steinmetz, Sol, et al. eds. *Random House Webster's College Dictionary*. 2nd ed. Random House, 1997 (RHWCD2)

U.S. Department of Labor. *Dictionary of Occupational Titles*. 3rd ed., 1975